

# 徳富蘇峰・蘆花生家 周辺まち歩きマップ

～明治・大正・昭和初期 水俣川河川改修前の面影を探して～

徳富家は武家でありましたが、自力で生活を営むために、5代目太多七が造り酒屋を興し、酒造や廻船、たばこ等を生業とする商家として発展しました。太多七の後継者は、本家の才次郎(北酒屋)、分家の茂十郎(浜田倉)と才駄(新酒屋)に分かれました。北酒屋と浜田倉は浜町に置かれ、蘇峰・蘆花生家は浜田倉に当たります。そのため、生家の主屋は武家屋敷ではなく、商家の建物である町屋の造りをしているのです。

徳富家が2軒の商家を置いた浜町とその周辺(洗切町、天神町1丁目・2丁目、幸町の一部)は、昭和7(1932)～昭和9(1934)年に水俣川の河川改修が行われる前まで、旧古賀川と旧洗切川に挟まれた中州でした。両河川の船着場では人や物資が盛んに行き交い、古くから水俣の商業を担っていました。

とくとみそほう るか せいが  
徳富蘇峰・蘆花生家



徳富蘇峰・蘆花兄弟が幼少時を過ごした生家。県指定史跡。

現在の浜町周辺は、古くは戦国時代から町場として発展していた。江戸時代の末期頃には、水俣川の氾濫が繰り返されたことで、それまで上流の陣内を通過していた薩摩街道が、浜町へ付け替えられた。このことで、浜町周辺は、より水俣の人流・物流で栄える町となった。



現在の国道3号線が通過するまでの旧水俣橋から日新町、浜本通りへ続く主要道。

みなまたしりつ そほう きねんかん きゅうすいぶんこ  
水俣市立蘇峰記念館(旧淇水文庫)



蘇峰からの寄付金を基に設立された町立図書館。淇水文庫の名称で昭和4(1929)年に開館した。国登録有形文化財。

てんまんぐう  
天満宮



天満宮の周辺は、かつて「天神原」、現在は「天神町」といい、地域の名称の元になっている。

げんこうじ  
源光寺



水俣城代の中村将監が開祖と伝わる。かつては旧古賀川に面していた。本堂仏壇裏の床下には、薩摩から来る隠れ信者を受け入れた「薩摩部屋」がある。

市指定文化財「薩摩部屋」→

ためともじんじや  
為朝神社



源為朝が琉球に向けてここから出港する際、村人に与えたと伝わる衣の片袖が祀られている。

水俣市婦人会館

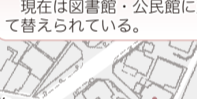


水俣の婦人会は、蘇峰の話をきっかけに発足した。

突き出し

かつて、蘇峰たちの祖父母の家があり、「蘇峰自伝」「死の蔭に」に書かれている。

公会堂



現在は図書館・公民館に建て替えられている。

突き出し(築出し)



源光寺の境内にあり、蘇峰の生家と関係がある。

おおのこうじんじんじや  
大園荒神神社



境内には、市指定文化財で樹齢450年以上と伝わる御木のムクノキがある。

えいたいばし  
永代橋



昭和初期の河川改修まで、水俣繁栄の中心的存在だった橋。洪水により、たびたび流出し架け替えられている。

みなまたはちまんぐう はまはちまんぐう  
水俣八幡宮(浜八幡宮)



かつては河口に突出し、現在の武道館辺りに相撲場があった。4月の例大祭には大勢の観客で賑わった。境内には蘇峰の愛郷の詩碑、拝殿には蘇峰が書いた神額がある。

神額内の「菅原正敬」は蘇峰の号の一つ→



相撲大会の賑わい

こんびら  
金刀比羅神社

汐見町へ移転

八幡のしり

干潮の時は沖の方まで砂浜が姿を見せ、貝がたくさん採れた水俣(健所)

すざき ばとうかんのん  
洲崎の馬頭観音



農作業のほか陸路の移動や荷運びに、牛馬の存在は欠かせなかった。河川改修により現在地に移された。当初は競馬大会も開催されていた中川原に建てられていた。

八幡町二丁目

中川原

干潮時には広大な中州となり、競馬大会や自転車競走等の催物が行われた

日本窒素肥料株式会社  
水俣工場

明治41年(1908)年設置  
古賀川の水運を利用して、大量の製品を運び出した



旧古賀川  
左が古賀地区、右が浜地区

塩専売所



浜町周辺には、石積みの水路やその跡が多く見られる。水路は、旧河道に沿って緩やかなカーブを描くものや、真っ直ぐで整然とした古い道に沿うものがある。川のもたらす水運、水害の脅威に対応しつつ、整然とした町並を整えた商業の町の輪郭を伝えている。



石の積み方にも注目。増設したり、途中で積み方が変わったりしている。

さいとうごろう  
西村庄五郎店と浜下通り



徳富一家が熊本へ転居した後、西村家が「衣屋」の屋号で商いをしていた。

- 史跡・寺社・歴史ある建造物
- ▲ 現在は見られない建造物・場所
- 地域名
- 旧河川・埋立前の海
- 現在の公共施設など
- お店(情報は裏面へ)